

第4回まるごと多摩川まつり

第46回多摩川流域セミナー

「二子玉川発！多摩川とつながるまちづくり」

開催報告

1. 概要

- 日時：2016年9月18日（日）9：30～16：00
- 主催：多摩川流域懇談会、共催：多摩川流域協議会
協力：東京都市大学

「第4回まるごと多摩川まつり」概要

項目	時間	場所	参加者数（概算）
多摩川を歩く～二子玉川編～	9:30～12:00	二子玉川駅～ 兵庫島公園	計 238名 ⇒参加者：173名 ⇒スタッフ：65名
第46回多摩川流域セミナー	13:00～16:00	東京都市大学二子玉川 夢キャンパス	
いい川づくり交流ひろば	10:00～15:00	兵庫島・東京都市大学 二子玉川夢キャンパス	

2. プログラム

多摩川を歩く～二子玉川編～9：30～12：00

- 開会挨拶：神谷博 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）
- 現地案内（見学コースについては4ページ参照、番号は見学コースの地図と対応）：
 - ①二子玉川ライズ・ルーフガーデン：佐山公一氏（TB ネット）
 - ②二子玉川公園：神谷博 氏（TB ネット）
 - ③高規格堤防：村尾学 氏（京浜河川事務所）
築堤工事等：林真史 氏（京浜河川事務所）
 - ④陸閘：杉山直史 氏（京浜河川事務所）
 - ⑤兵庫島公園：杉山直史 氏（京浜河川事務所）
- 閉会挨拶：竹本隆之 氏（京浜河川事務所副所長）

第46回多摩川流域セミナー：13：00～16：00

テーマ：「二子玉川発！多摩川とつながるまちづくり」

- 開会挨拶・総合司会：神谷 博 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）
- 会場提供代表挨拶：飯島 健太郎 氏（東京都市大学 総合研究所・環境学部併任教授）
- 基調講演：
「多摩川を豊かにする新たなアプローチ
～地域連携に特化した大学キャンパスと市民科学によるイノベーション～」
小堀洋美 氏（東京都市大学 特別教授／生物多様性アカデミー代表理事）
- 話題提供：
 - 『川の利用の基本』 葛原隆 氏（京浜河川事務所 占用調整課）
 - 「二子玉川 水辺空間まちづくりの未来」 二子玉川エリアマネジメント、NPO 法人せたがや水辺デザインネットワーク、ミズベリング二子玉川未来会議
- パネリストによる話題提供：
 - ① 「玉川と多摩川」 中村輝之 氏（玉川町会／二子玉川エリアマネジメント理事）
 - ② 「水辺と子どもたち」 中西修一 氏（NPO 法人せたがや水辺デザインネットワーク）
 - ③ 「水辺空間活用まちづくり」 佐藤正一 氏（二子玉川エリアマネジメント代表理事）
- パネルディスカッション： 「二子玉川の水辺の未来」
コーディネーター：小林直子 氏（二子玉川エリアマネジメント）
パネリスト：発表者3名、坪田哲司 氏（ミズベリング二子玉川未来会議）
 - 「夏休み自由研究の発表」： 榎本正邦 氏（とどろき水辺の楽校）、ケイシュン君、シゲユキ君
- 意見交換：「未来の多摩川夢プラン」づくり
- 閉会挨拶：服部敦 氏（京浜河川事務所 所長）

いい川づくり交流ひろば：10：00～15：00

多摩川流域懇談会、多摩川で活動する市民団体等がブースやパネルを出展。

〈第1会場：兵庫島公園〉

- 体験ブース…ストーンペインティング、源流の丸太切り、災害体験車（降雨体験車・土砂災害体験車）
- 展示コーナー…排水ポンプ車、照明車、多摩川ミニ水族館
- 炊き出し訓練…災害備蓄品の試食（アルファ米）、多摩川産アユの塩焼き
- 多摩川クイズラリー
- 水辺ガサガサ体験（降雨のため中止）

〈第2会場：東京都市大学 二子玉川夢キャンパス〉

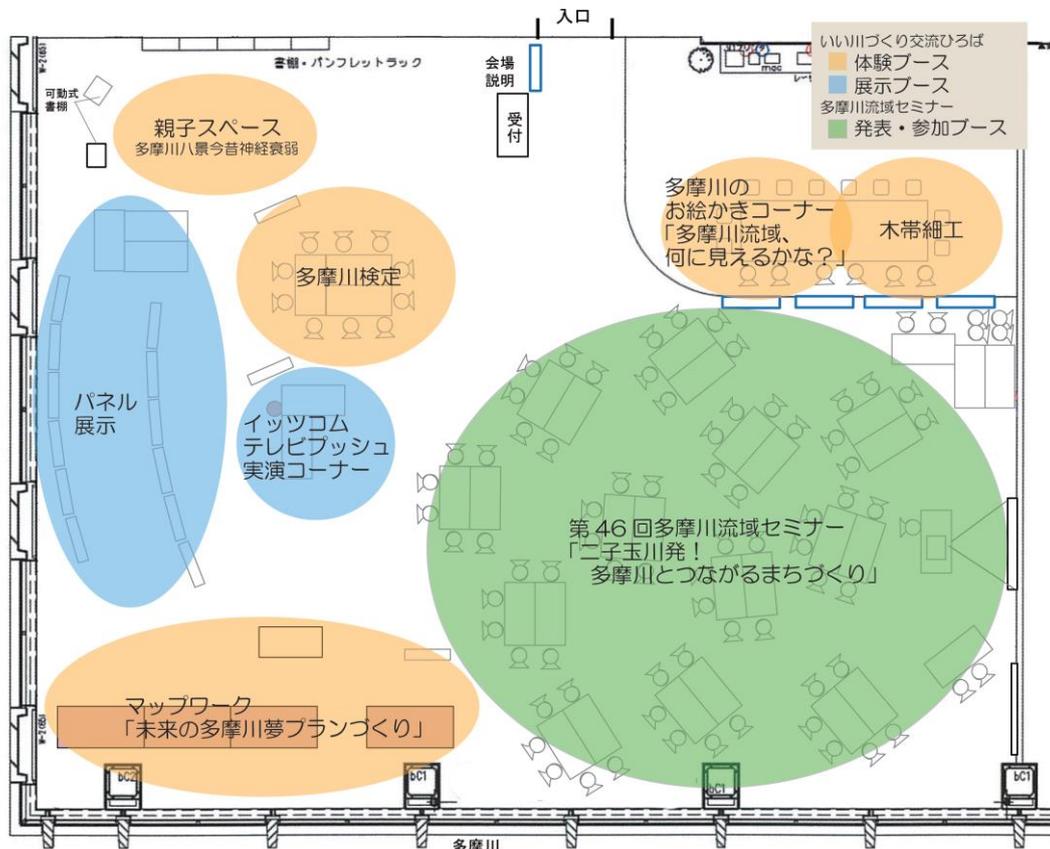
- 多摩川検定
- 体験ブース…多摩川いいところマップづくり、木帯細工、多摩川お絵かきコーナー
- 展示コーナー…パネル展示、生き物展示
- 親子スペース

◇ いい川づくり交流ひろば 第1会場：兵庫島公園



◇ いい川づくり交流ひろば 第2会場 (兼 多摩川流域セミナー会場)

: 東京都市大学 二子玉川夢キャンパス



会場案内図

3. 多摩川を歩く～二子玉川編～

当日は小雨が降る状況でありましたが、12名の参加者にお集まりいただき、二子玉川の多摩川沿いを歩きました。市民団体、河川管理者や流域自治体職員の解説のもと、多摩川を模した流れのある二子玉川ライズ・ルーフガーデンのビオトープや二子玉川公園の日本庭園、多摩川河川敷などを見学しました。

また、散策中はダイサギやアオサギといったサギ類が観察され、多摩川の生態系の一端を垣間見ることができました。

参加者からは、二子玉川から見える多摩川の魅力に感心の声が上がっていました。



※①～⑤のポイントでは立ち止まって説明があり、他の見どころ（★印）については歩きながら紹介がありました。

当日の見学ルート

3.1 集合

- 9時半に二子玉川駅前に集合しました。参加者には説明資料（しおり）が配布されました。



集合の様子（二子玉川駅前）



「多摩川を歩く」しおり

3.2 開会挨拶【神谷氏（多摩川流域懇談会運営委員長）】

- 多摩川流域懇談会運営委員長の神谷さんより、まるごと多摩川まつり、多摩川流域懇談会の趣旨について説明がありました。多摩川流域懇談会は、いい川づくりをするために行政と市民のパートナーシップにより意見交換を行ったり、多摩川流域セミナーを開催したりしているとの紹介がありました。
- 見学ルートやスケジュールについて、京浜河川事務所の林さんより説明がありました。
- 参加者には多摩の源流水が配られました。



開会挨拶（神谷氏）



見学ルートの説明（林氏）

3.3 現地見学

3.3.1 見学箇所における説明

① ニ子玉川ライズ・ルーフガーデン【佐山氏（TB ネット）】

ニ子玉川ライズ 5Fのルーフガーデン、4Fの人工池で説明がありました。参加者は屋上に再現された多摩川の流れや植物等の自然に感心の声をあげていました。

- このルーフガーデンでは、屋上緑化がされています。ここにある植物はそもそもが多摩川に生息しているような種です。屋上に作り出されたみどりに、自然に棲む鳥などが来てくれると良いなという目的があります。
- ルーフガーデンは、働いている人や買い物客にとってのくつろぎスペースとしても活用されています。
- ここには、多摩川を再現した流れが作られています。この流れはライズ内に降った雨を地下に貯めて循環させることで作り出しています。循環させる際には、フィルターを通した上で塩素を入れて雑菌・汚染処理を行っています。水が少なくなった場合には水道水を追加することで対応します。
- 多摩川というのはもともとレキ河原の川でした。そのような河原に特有のカワラノギクやカワラニガナという植物が多摩川には生息していましたが、最近では絶滅危惧種に指定され、数も減ってしまいました。そこで、保全対策の一環として、このルーフガーデンにそれらを移植することによって、数を増やしていこうという取り組みを行っています。
- この植物の移植については植物の専門家が来て、毎月モニタリングを実施しているところです。
- 4Fにはメダカやドジョウが生息する、めだかの池（人工池）があり、周囲にはサンカク

イなどの水田植物なども植えられています。

- ここでは水辺の生き物が生息できる水質を保つために、水温・pH・残留塩素濃度が常時表示されています。

○ 質疑応答

Q：この場所は、結局どこの所有物となっているのですか。

A：ここは、ライズの所有者である東急電鉄の所有となっています。



ライズ 5F ルーフガーデン



説明を聞く参加者たち



多摩川を再現した流れを観察する



ライズ 4F メダカの棲む人工池

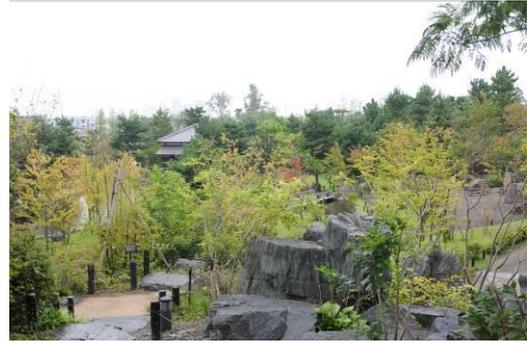
② 二子玉川公園【神谷氏 (TB ネット)】

ここでは、最近開設された二子玉川公園についての説明がありました。今回は、公園内にある帰真園を中心に見学を行いました。

- 駅前の街と多摩川の自然をつなぐ位置に存在する、世田谷区立二子玉川公園は平成 25 年 4 月に開設されました。
- この公園内には、世田谷区初の本格的な回遊式日本庭園である「帰真園」というのがあります。この帰真園にも多摩川を模した流れがあり、水干から河口まで再現されているほか、国分寺崖線なども表現されており、縮景となっています。
- 帰真園の中には、清水組（現:清水建設）の副社長の離れであった旧清水家住宅書院が移築復元されています。これは世田谷区登録有形文化財にもなっており、中に入ることもできます。



帰真園についての説明



帰真園の様子



園内を歩く参加者たち



旧清水家住宅書院

③ 高規格堤防【村尾氏（京浜河川事務所）】

多摩川河川敷を眺めることができる二子玉川公園の眺望広場で高規格堤防についての説明がありました。

- 高規格堤防とは、堤防の高さの 30 倍の広い幅をもった堤防のことを言います。
- 高規格堤防は、通常の堤防とは異なり、堤防の高さを超えた水がゆるやかに流れて、堤防が壊れないようにつくられています。また、幅が広いので、洪水が長期間続いても浸透水によって堤防が壊れることも避けられます。このように、高規格堤防では、昨年に関東川で起きた鬼怒川の堤防決壊のようなことは起こらない仕組みになっています。さらにこの堤防は、地震にも強い構造となっています。
- この二子玉川地区の高規格堤防は、二子玉川公園や都市計画道路の整備と協力しながらつくられており、公園から多摩川の方に歩けるような整備が行われています。



高規格堤防の説明



説明を聞く参加者たち

④ 陸閘【杉山氏（京浜河川事務所）】

河川敷を離れ、旧堤防を分断している陸閘について説明を受けました。

- 陸閘とは、堤防内の利用等の理由により、堤防の一部を分断して通路として使えるようにしたものです。普段は堤防内外の通り道として使われるため、開いたままですが、洪水時などの緊急の場合は、間に板を何枚も入れることによって道を塞ぎ、堤防として機能するようにできます。
- この地区で堤防が建設される際、川の近くには料亭等が多数ありました。そのため、堤防ができると、多摩川が見えなくなってしまうので困る、などの意見がでてくるようになり、堤防の川側に料亭などを残したまま建設されることとなりました。このような背景から、堤防内外をつなぐ通り道を作ることが必要となり、現在の陸閘が築かれることとなりました。

○ 質疑応答

Q：この陸閘は、最近板を入れて閉じたことがありますか。

A：ここ最近は、陸閘を実際に閉じたことはありません。



陸閘を見学する様子



多摩川西陸閘

⑤ 兵庫島公園【杉山氏（京浜河川事務所）】

ゴール地点である子供の広場がある兵庫島公園を見学しました。

- 兵庫島公園のあたりは野川と多摩川の合流点になっていて、昔はアユの料亭が並んでいました。現在では、このあたりの水辺で、子どもたちがガサガサ体験（水辺にすむ生き物を捕まえる）を行ったりしています。
- 兵庫島の由来は、新田義貞の息子（義興）が多摩川の戦で負けてしまうところまでさかのぼります。その際、従者の一人であった由良兵庫助が流れ着いたのが現在の兵庫島であり、それが名の起こりと言われています。
- 兵庫島公園は、平成元年に手づくり郷土賞を受賞しました。



野川を渡る参加者



兵庫島公園での説明を受ける



兵庫島公園案内図



ゴールとなった子供の広場

○移動途中の質疑応答や意見

Q：このあたりにもホタルがいると良いのですが…。

A：地域にもともといないものを持ってくると、生態系を壊すこととなります。また、ホタルは大河川よりも小さい水路のようなところの方が生息しやすいです。

Q：多摩川河川敷の草刈りはやっているのですか。

A：草刈りは、雑草をむやみに成長させないように、時期をみて行っています。

Q：水が汚れてしまうことで、まっさきにいなくなる魚はいるのですか。

A：イワナやヤマメは水のきれいなところに生息します。

Q：水辺の楽校って多摩川に結構あるのですか。

A：多摩川で活動している水辺の楽校は 20 校あり、皆さん頑張って取り組んでいらっしゃいます。

Q：一番堤防の弱いところはどこですか。

A：雨の降り方によって、弱くなる部分は異なります。

Q：多摩川については府中の博物館でも何かやっていませんでしたっけ。

A：府中郷土の森博物館では、多摩川についての常設展示等を行っています。

<意見・感想>

- ・ルーフガーデンが素敵でした。
- ・このイベントには何回か参加していますが、河川というのをこういう風に見る機会というのはなかなかないので、非常に面白いです。
- ・また参加したいと思います。
- ・昔に比べて、多摩川は随分きれいになりましたね。
- ・帰って友達に情報を広めようと思いました。

など

3.3.2 見どころの説明

立ち止まって説明を行う箇所以外にも、移動の途中に、以下をはじめとする様々な河川施設、自然環境、歴史に関する説明が行われました。

- 搭乗型移動支援ロボット実証実験区間



多摩川の河川敷では、セグウェイ等の搭乗型移動支援ロボットの実証実験区間が設けられています。

- 緊急用河川敷道路



大規模震災発生時に復旧活動に必要な資材等を運搬や緊急用車両の通行などの緊急輸送路として大型車両が通れるように広い道の整備が行われています。

- たまりバー50キロ



「たまりバー50キロ」という、大師橋緑地付近から羽村取水堰までの53キロに及ぶウォーキング・ランニングコースが整備されています。コースの道路表面には500mごとに距離表示があります。

- アユの遡上

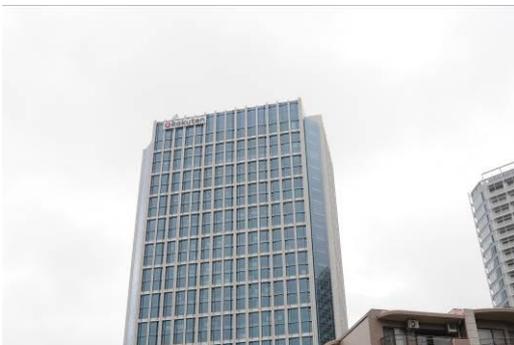
水質の改善によってアユの遡上状況は改善されてきました。H26年には過去最多の約520万尾の遡上が推定され、H27年でも約463万尾が遡上していると推定されています。

● 多摩川の自然環境



多摩川では、ダイサギやアオサギが見られました。その他にはカワウやムクドリなども見られます。また、河川敷ではクズが繁茂している様子が見られました。植物等にロープが張ってある場合は、希少種を保護します。

● イーグルアイ



イーグルアイとは、二子玉川ライズビルの屋上に設置された監視用のライブカメラ(リアルタイムカメラ)のことです。広域な多摩川の様子を把握することが可能なため、洪水時や大規模災害時の重要な監視ツールとなります。

3.4 午前の部閉会挨拶【竹本氏（京浜河川事務所副所長）】

竹本さんより午前の部閉会挨拶がありました。

- 二子玉川駅からここまで長時間お疲れ様でした。二子玉川地区の施設、魅力等、色々なことをお話しできたのではないかと思います。予定の時刻より少し早目になりますが、これで多摩川を歩くを終了したいと思います。お時間のある方は是非、午後の部（流域セミナー）にも足を運んでみてください。



閉会挨拶（竹本氏）

4. 第46回多摩川流域セミナー

4.1 開会挨拶【神谷氏（多摩川流域懇談会運営委員長）】

- 今日のセミナーは、最初にご挨拶を都市大学さんからいただいて、それから基調講演に移ります。その後、京浜河川事務所からお話があって、それから地元の二子玉川のまちづくりのお話、それから子どもたちの夏休み自由研究の報告、最後に、大きな多摩川の地図を見ながら「未来の多摩川夢プラン」というものをいろいろ議論してみましよう。

4.2 会場提供代表者挨拶【飯島氏（東京都市大学 総合研究所・環境学部併任教授）】

- 健康面から、緑豊かな河川の利用についてお話しします。
- 私たちが病気を発症する 80%以上の原因はストレスです。
- ストレスをひき起こす外部からのプレッシャーにはいろいろあり、は物理・化学的なストレスというのもあります。最近、増えている熱中症は熱ストレスです。
- ある種の環境汚染ということで、特定の物質が体の中に多く入ってくるとアレルギーという形で反応することもあります。その毒性が強ければ命の危機に陥ります。その物質は濃度で体に対する影響が出ます。環境の浄化作用がきちんと機能していれば、ちゃんと希釈してくれますが、人為化の著しい都市部では、その希釈能力も実は非常に低下しています。
- 都市部に隣接する緑豊かな河川は、日中は海のほうから、夜間は山岳地帯のほうからきれいな空気を都市部に送ってくれますし、希釈をしてくれたり熱を冷ましてくれたりという、物理・化学的な環境の改善という意味でも非常に私たちの健康に役立ちます。
- 私たちは、外の環境と自分の内なる環境との間は、知覚を通して認識します。コンクリート、アスファルトで覆われてしまった場所を眺めているときというのは、交感神経が高まり緊張状態になります。緑を眺めると癒されるというのは、実は自律神経の中で副交感神経という、休む必要があるときの自律神経が優位になるためです。そういった意味でも、都市部に隣接する緑豊かな河川は非常に重要だと思います。
- 実は健康な人でも、1日に1,000以上のがん細胞というのは見え隠れしているのです。しかしながら、ナチュラルキラー細胞とか免疫力でやっつけてくれている人は発症しないで済んでいます。しかし、たまたまストレスだったり生活習慣が乱れていたりして、がん細胞のほうに少し優位になってしまうと発症するわけです。アメリカの調査では、歩行をすることが、がんの発症を抑えるということに役立つと言われています。
- 日本でも、森林セラピー基地という、トレッキングして楽しいコース、健康によいコース等が全国で指定されていて、歩いて健康を維持しようという運動が展開されています。ただ歩くだけでなく、より環境のいい緑の中を歩くことが健康につながります。
- 誰でも週末に丹沢など郊外の森林等へ行けるかというところではありません。そのため、多摩川も含めた都市部に隣接する緑豊かな河川等が重要なのです。都市部も健康的なライフスタイル維持のためにぜひ多摩川を利用していきましょう。



代表者挨拶（飯島氏）

4.3 基調講演

「多摩川を豊かにする新たなアプローチ

～地域連携に特化した大学キャンパスと市民科学によるイノベーション～

小堀氏（東京都市大学 特別教授／生態多様性アカデミー代表理事）



小堀氏

小堀さんには、二子玉川を活性化するための夢キャンパスの活用と、市民科学によるイノベーションという2つのアプローチでお話しいただきました。

○東京都市大学夢キャンパスと地域・多様な組織との連携

- 東京都市大学の夢キャンパスは、大学の教職員、学生が自主的な企画を実践するとともに、地域や多様な組織と協同して教育研究活動を推進する拠点となっています。単に場所だけ貸すのではなく、地域とのコラボで研究教育、地域に資することがミッションです。
- 多様な活動事例の1つとして、都市大学の環境教育活動に関するもので、教職員、学生を中心に環境まちづくりや地域等と多様なテーマで学ぶプロジェクトがあります。そこから生まれたアイデアは、二子玉川のエリアをはじめ多様なまちづくりに生かされることもあります。
- 次世代を育てたいということで、子どもを対象にした活動に大変力を入れています。例えば、子ども・保護者向けの科学体験教室。これは学生や教員と多様な組織が連携をして、科学で夢をかなえる方法というのを発見してもらいます。また、女子中高生や若い女性技術者、大学生と課題解決のチャレンジのプロジェクトなどもあります。
- 地域や多様な組織と都市大との共同企画も行っています。一例として、NPO 法人せたがや水辺デザインネットワークと共同で「多摩川子どもシンポジウム in 世田谷」というものを行い、子どもたちと一緒にワークショップもしました。またグリーンインフラについてのイベントである「雨水ネットワーク全国大会」が二子玉川ライズとの共同企画で行われました。
- 「雨水ネットワーク全国大会」では、生態多様性アカデミーという一般社団法人、二子玉川ライズと箱根植木株式会社と一緒に、ライズ5階のルーフガーデンへ絶滅危惧種であるカワラニガナを植えており、参加者の人には、この取り組みにかかわる費用を推定してもらったプロジェクトをしました。絶滅してから保全しようと思うと、お金も時間もエネルギーもかかるということをみんなで実感しました。そのほかには、生態多様性アカデミーと、市民ができる水質を測るパックテストを発売している共立理化学研究所と、都市大の学生と一緒に、ライズの人工池に棲んでいるメダカのすみ心地はどうかというのを考えました。気温、水温、pH が極めて高く、公共の施設で塩素消毒が必要なため残留塩素も多少あります。メダカは絶滅危惧種にはなっていますが、非常にタフな生き物なのでこのような環境でも大丈夫そうです。しかし、他の生き物はどうかという疑問が残りました。

○市民科学が起こすイノベーション

- ここでいう「イノベーション」は、新しいアイデアから社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらす自発的な、人・組織・社会の幅広い変革を意味するという意味で使っています。市民科学がなぜイノベーションになるのでしょうか。
- 市民科学というのは、いろいろな国で長い歴史を持っています。最近では国際的に、市民科学とは、市民が科学研究のプロセスにかかわること、といった定義がされています。「市民科学」という言葉は、2010年に初めて辞書に載りました。
- では、市民科学というのは、研究者が研究するプロセスを市民の人がやるというものです。では、研究者が研究するときどういうプロセスを踏むかということ、まず研究テーマを設定します。そして、それに関する情報を得る、研究計画や調査方法を検討する、フィールドでモニタリングやデータを収集する、それをまとめる、解析して発表する、といった流れになります。
- 市民科学にはいろいろなパターンがあります。1つは、従来からやられていた貢献型です。モニタリングやデータの収集のところにだけ市民がかかわるものです。現実にはこれが圧倒的に多いです。それ以外に協働型というものや、市民の人が研究者と同じプロセス全部を踏むことによって、市民科学者に育ってもらおう協働創生型があります。
- 市民科学のイノベーションが生まれた社会的背景としては、国内外ともに自然社会環境を取り巻く状況が、大変複雑化・多様化して、解決すべき課題が時間的・空間的にも拡大しているということがあると思います。現状を的確に把握するためには、広域的・長期的なモニタリングに基づくデータの蓄積が必要です。しかし、研究者や行政による限定的なデータの収集や調査だけでは、残念ながら限界があり、多くの市民の協力が不可欠です。地域には、長いこと地域の自然や社会・環境・生物変化に敏感な市民による調査がされており、そこに市民が研究者や行政の研究や調査を補完する新たな市民科学の扉が開かれたものと思います。
- 市民科学というのは、「研究」、「生涯教育あるいは社会教育」、「社会の改変」といった3つの要素から成り立っています。
- 研究では、新たな知見や発見をする、現状を把握するだけでなく、仮説の証明、モデルの構築も市民参加で可能になります。それに関わった市民は自分の知識、調査方法の技術を高めたり、価値観や態度、参加意欲に変化がもたらされます。そして、その結果が地域の課題解決になったり、あるいは行政がこういうプロジェクトを企画したら、それを政策提言に生かすようにしてもらいたいです。このようなことが持続可能な社会の形成に資するようになると思います。
- 近年、私たち市民は、スマートフォンを使って、ビッグデータをとることが可能になりました。eBirdというコーネル大学がやっているプロジェクトでは、世界で5,000万人の市民、鳥好きの人がプロジェクトに参加して、得られたデータから90編の学术论文が作成されています。
- 最近では急速に市民科学によって多くの科学論文が発表され、市民科学の重要性が認識されるようになりました。
- 市民科学が盛んなアメリカやヨーロッパと比べると、日本は大変少ない状況です。参加

型の調査はありますが、結果を行政が施策、政策に生かす、あるいはきちんとデータをとって蓄積する、保全に生かすといったところまで考えられていないプログラムが大部分なので、大変残念だと思っています。

- 私が関わった市民科学プロジェクトを紹介します。横浜で 1986 年から 2008 年まで 23 年間、毎日、市民、野鳥の会、横浜市職員が、どんな鳥が来たかを記録しており、この結果を学生と一緒に解析しました。冬、横浜にやってくる渡り鳥は、寒いところから暖かいところへ滞在をするので、温暖化が起こると、繁殖地から横浜へやってくるのは、繁殖地が暖かいために秋は遅れ、春は温暖化のために早く繁殖地へ行って、いい陣地をとって、長いこと子育てしたいと考えられ、横浜の滞在期間はたぶん短くなると予測されていました。23 年間のデータを見ると、平均で、来るのは 1 週間遅く、旅立つのは 2 週間早くなっており、横浜の滞在が実は 1 ヶ月も短くなっているということがわかりました。データが 20 年以上ないと温暖化による影響が解明できなかったという事例です。
- 今後、市民科学を皆さんに進めていただきたいと思っていますが、その場合には、市民科学のプロジェクトの目的を明確にする必要があります。それから、プロジェクトの時期や規模、テーマはもちろんのこと、パターンを発見するのか、現状を把握するのか、仮説を検証するのか、最終のゴールをどこに置くのか、研究なのか教育なのか、参加した人の行動変化なのか、問題解決なのか、ということをおおまかじめ明確にしておかなければなりません。
- プロジェクトを行う場合には、チームを形成し計画を立て、データ収集や情報のツール、それから参加者のニーズというのを把握する、プロジェクトを実施する、参加者のきめ細かい支援をする、発表するプロジェクトを評価する、といったプログラムのデザインが必要になります。
- 今回話したようなことには多様な人が関わる必要がありますが、どこもこれだけの人を配置することはできないので、いろいろなところと多様なパートナーシップで、自分の強みは生かし、足りないところはお互いに補完する多様なコラボレーションが必要だと思います。

4.4 河川事務所による話題提供

「川の利用の基本」 葛原氏（京浜河川事務所 占用調整課）

京浜河川事務所の葛原さんに、河川を使用するための制度をご紹介していただきました。

- 多摩川は河川法に基づいて管理しています。河川法は、洪水等による災害の発生の防止の「治水」、河川の適正な利用の「利水」、さらに「環境」の3つの目標があります。
- 多摩川を実際に使うには、土地を使用したい場合には河川法の24条、トイレ等を設置したい場合には河川法の26条というような許可を受ける必要があります。今日は、土地の使用に当たっての許可基準である24条の関係について話をしたいと思います。
- 川の中は、全て国有地ではなくて民有地があります。河川法の土地の占用（独立して使用すること）とは、川の中の河川管理者が所管している土地についてのみを言います。
- 川の中の国有地を使用したい場合、誰にでも、何の利用でも許可できるのかということですが、昭和40年には河川敷地占用許可準則というルールがつくられていて、こちらに則って、河川管理者も許可をしています。
- 許可の原則として、まず自治体とか鉄道会社、電気事業者のような公的主体、公園、グラウンド、鉄道、橋といった公的な利用に限定をされています。さらに洪水で増水した場合を考え、河川の中に工作物を設置する場合には、撤去、転倒できるような、流水の障害にならないようなもの、機能空間区分に沿った形のものになっているかどうかを判断することになっています。これら全てのことを満たしている場合に許可があります。
- 河川に対する多様な利用をより一層推進するために、平成11年に包括占用というものをつくりました。具体的な利用方法や配置、設定などは自治体さんのほうの創意工夫を生かした制度という形でしたが、目的、占用者、施設については、従前の公的な利用の範囲にとどめているという制度でした。
- しかし、ますます河川空間を活用したまちづくり、地域づくりというのが全国的に広がっているということで、平成23年に「都市及び地域の再生等のために利用する施設に係る占用の特例」が導入されました。今まで河川敷の占用許可は、公的主体による公的利用に限定されていましたが、この特例制度では、協議会で地域の合意を図った上で都市・地域再生等利用区域を指定して、区域内の占用許可を受けることができる施設や許可方針を策定し、占用主体の決定を行うという形となり、営業活動を行う事業者も、占用主体としてイベント施設やオープンカフェとして河川敷を利用できるようになっています。
- このように、最初に準則ができたときは、治水一辺倒でしたが、社会ニーズに合わせて占用の範囲を徐々に拡大していき、現在は、営業活動を行う事業者等でも河川敷地の利用が可能となりました。



川の利用について（葛原氏）

4.5 パネリストによる話題提供

3名のパネリストの方に、二子玉川における多摩川について話題提供をしていただきました。



中村氏

中西氏

佐藤氏

① 「二子玉川 水辺空間まちづくりの未来」

中村輝之氏（玉川町会／二子玉川エリアマネジメント理事）

- 戦後の玉川は、砦線沿線のヨシ原から砦のほうに向かう電車の周りには何もなくて、砦までほとんど畑と田んぼの街でした。また、小学校の周りもほとんど畑と田んぼで、中には池がたくさんあるような街でした。
- 玉川団地が昭和 32 年にできて、それまでは電気だけだったのが、水道、ガス、下水道というインフラが整備されてきました。生活の様式が一変した、我々の中では画期的な時期でした。
- 昭和 29 年から 30 年前後、多摩川の河原で大腸菌がたくさん出て遊泳禁止になりました。
- 多摩川流域に人口がふえて、生活水が流れてということで 60 年から 70 年代にかけての多摩川の河原では、調布堰のところで泡が空中に飛んでいるような状態がずっと続きました。我々玉川の者も、多摩川の河原から離れた暗黒の約 30 年でした。
- その後、多摩川の河原は、行政が兵庫島公園をつくったり運動場をつくったり、川とは関係ないところでは利用価値がだいぶ進んで、子どもたちも遊ぶようになりましたが、川と親水する、中に入って遊ぶということは一切ありませんでした。河原がよくなった 2002 年頃から川で遊ぶというのが少しずつ見えてきて、水辺の楽校等で、河川敷を使ってガサガサができるまでになりました。
- 昭和 44 年に玉川高島屋ができたことで玉川が商業地域としての地位を確立してきた、そんな時代です。
- その後、再開発が完成したことで玉川が大きくまた変わりました。これは約 30 年前に「再開発を考える会」が起こって、それから「二子玉川東地区再開発準備会」に移行し、コンラン&パートナーズが考えたコンセプトができてから現実に動いてくるのだなと感じました。
- 我々は、この玉川ができたときに、ここが最初のスタートではなくて、これからが本当のまちづくりだと思い、玉川の活動に入っています。今、玉川町会では、実際に「まち研」などでまちづくりが進んでいますが、中学生は地域のボランティアにかなり積極的に参加してくれますし、小学生は「クリーンタウン作戦」という、学校ぐるみで街をきれいにしようと、毎月やっている大きな街の行事に 1 学年ずつで参加してくれています。

- 玉川で一番力を入れているのが、生活道路の安全対策です。3年ぐらい前に「ゾーン30」というのを、住民発意で初めて全国に先駆けて、玉川4丁目と3丁目の一部で立ち上げました。そういう活動を始め、次年度は道交法が改正になり、さらに安全な街にしようということで、自転車の「たまチャリルール」をはじめました。「足ポン」（一時停止には両足でとまりましょね）、「押しチャリ」（混んでいるところは自転車を押しましょね）、「ヒダリンクル」（左に回るときはインサイドに入らないで大きく左をキープして回らましょね）という3つを守れば玉川の街は安心な街になるかなと考えています。
- 最近取り組んでいるのは、セグウェイの社会実験です。セグウェイに乗って、人と対面する距離というのはすごく良くて、こういうゆとりを持って人に気遣いしながら走れる街、そんなことが交通安全につながるのかなと街としては取り組んでおります。

② 「水辺と子どもたち」 中西修一氏（NPO 法人せたがや水辺デザインネットワーク）

- 「せたがや水辺の楽校」と「きぬたまあそび村」とが一緒になり、去年、NPOとして活動を始めました。
- 産官学民というのに「子ども」をつけて、産官学民子という活動を僕らの活動の柱としています。
- 自分たちの活動の一つとして、メダカの池という人工地盤上の池の環境と野川の環境、多摩川の環境を見ていって、それをよくしていきましょうという活動を、二子玉川ライズと手を組んで、一緒に取り組んでいます。
- 子どもたちと一緒にライズ4階のメダカの池から駅前を通って野川まで生き物を探しに行った時があったのですが、「安全を」というのが街のキーワードの1つにもなっていますので、多摩川で遊ぶにはライフジャケットを絶対つけなくちゃいけないよということを教えるため、街中をライフジャケットを着て歩きつつ川に行くような運動をしています。
- その他にも高校や小学校の生徒が多摩川との接点を持つことを目的に、一緒に水辺のガサガサ体験を行っています。
- 今後は市民科学を僕らの活動の中でも軸の一つにしていこうかなと考えています。いろいろな人たちが集まって、多摩川の外来種がどうなっているのかということや、子どもたちと大学と市民とが一緒に取り組むことの協力させていただければと思っています。
- 私たちは河原で何かをするということを軸に置いていきたいと思っています。多摩川で何かやりましょと言った時に、川を目の前にしてから考えましょということで、町会、高島屋、国土交通省、新聞記者の方などと一緒に河原に集まっていろいろ相談をしています。最近、河原で結婚式を実現させました。
- 二子玉川というところは、いろいろな人がいて、いろいろな企業や組織があって、そこで何かやろうと思えば、すぐ川に行ってできるという強みがある場所だと思います。多摩川は、隅田川や大阪の運河、品川区の運河のような感じではなくて、自然河川です。一応堤防には囲まれていますけど、その間を自由に流れています。1日12万人の乗降客数があるような東急の駅の下でアユが卵を産んでいるというような、とても良い環境の場所があるので、これを生かして産官学民が集まって、子どもたちを中心にいろいろなことをやっていこうという動きを今つくっているところです。

③ 「水辺空間活用まちづくり」 佐藤正一氏（二子玉川エリアマネジメンツ代表理事）

- 二子玉川エリアマネジメンツは、結成してまだ2年です。しかし実は、この地域は以前から住民の人たちがいろいろな形で活動してきました。
- 二子玉川100年懇話会は、みんなが集まって、2カ月に1回いろいろな情報交換をしようというところから始まった団体です。町会から老人会、PTA、小学校等々から世田谷区の行政や企業の皆さんも、みんなで集まって情報交換をするという場があります。この場を通じて、様々なプロジェクトが立ち上がってきました。
- 例えば、防災対策用のマップをつくったり、見やすい掲示板をつくったり、みんなで街のことをどう考えていこうかというような研究会をやり、その答申を区長にお渡しするというものもしています。
- 色々な取組みの中で出来上がってきたのが、二子玉川エリアマネジメンツという団体です。従来からずっと町会は町会で、企業の皆さんは企業の皆さんでいろいろな活動を、行政は行政で行政サービスをしてきています。しかし、町会だけ、企業だけ、行政だけではできないことを何とかつないでいく団体としてでき上がりました。
- 団体構成としては、玉川町会、玉川高島屋をやっていらっしゃる東神開発、東急電鉄、アドバイザーが世田谷区となっています。
- 今年から主な活動として、河川敷に安全・安心とまちづくりのにぎわいを培う取り組みをしていく活動、歩行空間をより安全・安心で回遊しやすい空間にしていく活動という2つをやっていこうと決めました。
- 具体的には、NPOせたがや水辺デザインネットワークと一緒に、「かわのまちアクション」ということで、マルタウグイの産卵環境づくりをしたり、「TOKYO ART FLOW」というアートイベントでは、水辺カフェ事業というのを実験的にしたりしました。
- 今後は、兵庫島公園や二子玉川公園でいわゆるキッチンカーと言われるものを置いた社会実験などを行う予定です。

4.6 パネルディスカッション

小林さん司会のもと、「二子玉川の水辺の未来」というテーマで、パネリスト 4 名による意見交換を行いました。



4名のパネリスト（左から坪田氏、中西氏、佐藤氏、中村氏）



司会の小林氏

【小林氏】

- 多摩川で生まれている様々なアクティビティなどを紹介しつつ、二子玉川が多摩川の中の一つの街としてどのように発展していったらいいかということも、お話を聞かせていただけたらと思っています。
- 実は二子玉川の多摩川の水辺でやりたいことはたくさん話に出ていて、例えば、多摩川をSUP（スタンドアップパドルボーディング）で通勤したらいいのではないかとか、水辺ウエディングとかそういうような妄想を出していた時期がもう 2 年前になります。
- そのあたりの妄想のことや実際どんなことができたかということなど、ミズベリング二子玉川会議発起人の坪田さんにお話ししたいと思っています。

【坪田氏】

- 2014 年の 5 月にミズベリングニコタマ会議を初めて開催し、約 70 人の方に来ていただきました。実は水辺の取り組みは、いろいろな方が様々な形でやっていらっしゃったのですが、皆さんそれぞれ点でやっていて、二子玉川の水辺で初めて一緒に集まったというのを実感しました。
- そこから初めて妄想ということをいろいろと考えて、ここで何ができるのかなということをいろいろと考え出したというのが経緯です。

【小林氏】

- ニコタマ会議は全国で一番最初のミズベリング会議だったと聞いております。

【坪田氏】

- 各地で行われた各地の会議という意味では 1 番目でした。

【小林氏】

- そこからどれぐらいの活動をされたのでしょうか。

【坪田氏】

- 例えば多摩川でどんなことができるかをみんなで考える会を、この 2 年間で 6～7 回ぐらいは実施しています。

【小林氏】

- 最近、水辺デザインとのコラボレーションで、キャンペーンに合わせてライフジャケットを作りましたよね。

【坪田氏】

- 東急さんの助成金をいただき、ライフジャケットを子どもたちが着て、水辺で安心して活動できるまちづくりをしたいということで、ミズベリング・ライフジャケットキャンペーンというのをこの4月、5月にさせていただきました。

【小林氏】

- SUP（スタンドアップパドル）について、ぜひご説明をいただきたいです。

【坪田氏】

- 2014年の後半ぐらいにゲリラ的な活動を行っていました。その2つが、スタンドアップパドル、SUP（サップ）と、ビアピクニックでした。
- 共通して両方とも言えることは、行政・京浜河川事務所もしくは世田谷区の方々から、何も許可を得ずにやっています。基本的に水辺は自由使用が原則なのです。個人ベースで誰に対しても迷惑をかけないという前提であれば、みんな自由に使っていいということです。その枠の中で使い倒してみようという2つの事例が、こちらのSUPの体験と、ビアピクニックだったと思います。

【中西氏】

- 多摩川の二子玉川周辺の河川敷は、全部公園になっているのです。だから、国土交通省さんから「いいよ」と言われても、今度は世田谷区の網がかかっている、なかなか実現できません。ただ、最初から「イベントをやるぞ」ということで集まるのではなく、「集まってきたよ」という形でやったということで、ゲリラ的というわけです。

【小林氏】

- エリアマネジメントや玉川町会などでも、たぶん許可はおらないだろうけど、やりたいと思っていられることがおありだと思うのですが、いかがでしょうか。

【佐藤氏】

- 妄想の世界では、羽田からピューッと川沿いにここまで来たいですね。せっかく海外からいろいろな方が来て、車に乗って都心に向かって入っていくというよりは、二子玉川までずっと川で来て、ここで一休みしてから渋谷のほうに入っていく、そういう交通手段とか、ビークルみたいな様々なものが発達してきていますので、今後そういうものを使った新しい形の交通機関・整備ができるとおもしろいのではないかと思います。

【小林氏】

- 二子玉川ではオープンカフェがどうしてもできないのとか、対岸の二子新地ではできるバーベキューがどうしてもできないのとか、そういうお話をよく伺うのですけれども、これは何でできないのでしょうか。

【中村氏】

- バーベキューは以前はやっていましたが、機材を置き放しにして帰ってしまう、街の中にごみを全部捨てていってしまうという問題があり、地元からはバーベキューはやめてほしい、夜の花火はやめてほしいとの声がありました。そんな中で、バーベキューは、

世田谷区が多摩川を占有しているエリアでは禁止になった経緯があります。今、二子玉川地区の多摩川の中でバーベキューができるのは、水辺の楽校の一部の原っぱだけです。

- また、多摩川の河原は、洪水になるおそれがあるということで常設ができません。1時間半ぐらいで撤去できるものでないと設置できないという大きな制約があります。

【小林氏】

- 仕方ないかなと一番納得するところが、多摩川が自然河川だからということですが、自然河川だから、どういう価値があるからそういうことはできないのでしょうか。

【中西氏】

- 対岸の二子新地側はどっちかという住宅地から離れていますが、こちら側は、マンションが目の前まであり、そこに大勢で騒いだりとか煙が上がったりすることは避けたいと思うのは当たり前かという気はします。自然だからというわけではありません。

【小林氏】

- 最近、大阪などでは素敵なカフェができていますが、多摩川はそういうふうになるべきではないということですか。

【中西氏】

- カフェだったらいいのではないのでしょうか。例えばエリアマネジメントと街とか企業が一緒になって、ここで人を呼びましようとか。来る人たちにとっては風景も環境もいいところだと思います。

【佐藤氏】

- そういう意味では、この秋にキッチンカーを使った社会実験をやります。これは移動できる車なので、1時間半の間に移動できるという条件にも合います。まず河川敷の兵庫島公園などに、できるだけ毎週末はキッチンカーがあるような空間がくれたらいいなということ考えた社会実験に取り組んでいきます。
- 対岸側には確実にバーベキューをやる空間があるので、同じものをこっち側でやっても、意味があるとは思えません。だから、二子玉川らしさというか、空が抜けたこれだけの自然な空間があるところで、ゆっくりのんびり、質のいい時間を保てるような場所というのを、いわゆるカフェというような空気をつくりながら、提供していくほうがいいかと思っています。
- エリアマネジメントは、できるだけたくさんの人に来ていただきながら、一方で、来ていただいた方には、川に関する地道な取組み等をカフェの中でうまく伝えていけるのではないかなと思っています。

【中西氏】

- キッチンカーだけではなくてリヤカーが10台ぐらいで、川を最高に利用するためのものを、リヤカーで引いて1日出しておいて、夕方には帰ってくると対岸との差別化にもなるし、爽やかさとか快適さを提供できるといいかなと思います。

【坪田氏】

- カフェの話で、隅田川とか大阪の中之島、広島あたりが先進的な事例として取り上げられますが、あそこは全て人工の護岸なのです。そのため、撤去をしなきゃいけないというお話は全くなくて、定常的にお店の裏側に、例えばカフェがそのままつくれるという

ところが多いです。そういう中での事例がたくさん出来ているのですけれども、二子玉川は全く違います。

- 我々が理解しなければいけないのは、大都会から15分でこのような自然河川に出てくるというところだと思っています。自然河川と我々はどう向き合っていくのか。365日のうち大体5日ぐらいは氾濫するのです。そこを90分以内で撤去しなきゃいけないという条件が出てきます。我々は5日あふれるから使えないと思ってしまいますが、逆に言えば360日は使えるのです。360日をどのような形で使いこなすのかという視点でカフェの話も考えていければ、非常におもしろいことができるのではないかなと思います。

【小林氏】

- 例えば水辺ヨガは、二子玉川エリアマネジメントが主催ということで許可をいただいて、火気を使用して音楽を流してもいいということでやっておりますが、実際は、朝方のヨガは短い時間でやっていらっしゃる方もたくさんいます。また、許可を得ない形のアクティビティーはほかにも少しずつやられています。
- どうすれば色々なアクティビティーを実現できるのかというところを、住民側が一番知りたいのだと思うのですが、ハードの部分とソフトの部分を含め、そのあたりはいかがでしょうか。

【中村氏】

- 少しずつ規制緩和的な要素というのは出てきていると思うので、社会実験で、安全性とかそういうものが明確に伝わるような仕組みができてくると、実現できるのかなと思います。だから、やりたいことを社会実験的にしっかりと計画を立てて、一応行政の了解を得ながらやっていく。ゲリラ的でも実績をたくさんつくっていくことが実現できる早道かなと思います。

【佐藤氏】

- 行政の皆さんのほうが、すごく最近アクティブな気がします。やってくださいとか、相談してくださいという方が実は多いです。そういう意味では、我々はもっと具体的に計画して出していければ、いろいろなことが実現できるかなと思います。
- 一番気を付けなければならないのは、地域住民の皆さんのことだと思います。自分たちのやっている活動が何なのだというときに、ただ単ににぎやかしているだけではなく裏にはこういうことも考えているからですよとか、ここを目指しているのだから今こんなことをやっているのです、ということをうまく伝えていくべきだし、理解していただかなくてはいけない。そちらのほうが実は大事なかなと思います。

【小林氏】

- 私が中西さんと接するようになって、川というのは流域で見なきゃいけないと教えられました。流域というのは昔から文明が発生するところでもありました。では、なぜ多摩川で文明が出ないのでしょうか。

【中西氏】

- 多摩川って、昔からいろいろな市民の団体もすごく盛んに活動しているし、その歴史もありますし、いろいろな地形があり、川もいろいろ流れ込んできていて、二子玉川がその交差点になっていると思います。

- 二子玉川をもっと利用してもらいながら、それこそ多摩リバー（たまりば）なのでしょう。クロスするところに人がたまって、いろいろなことを考えるというような場所になってくれると、嬉しいと思います。

【小林氏】

- 多摩リバー（たまりば）文明ということで、エリアマネジメントの佐藤さんのほうからでっかい提言があったと思うのですが、お話していただけますか。

【佐藤氏】

- 経済学だとか地勢学だとか環境学だとか、川を軸に考え、周辺産業も含めるといろいろな学問がたぶんあると思うのですよね。そういう意味では、世界の大都市って大体川のそばにあるじゃないですか。いろいろな国の川の人たちが集まる世界河川サミットみたいなのがここで行われたりすると、おもしろいなと思っています。
- 結局その川も、流れると海に行って、海へ行けば向こうの川にだってもしかしたら流れ着いてしまうかもしれないみたいな、そういう視点でいろいろな切り口から、研究者やアーティストが集まってもいいと思います。そういった世界河川サミットのようなものが開催できるといいな、と思っています。そのためにも、まずはこの場所にいらっしゃる皆さんと固まっていき、日本の中でもここがすごい街になっていくというのが大事なのではないかなと思っています。

【中西氏】

- 109の一級河川がある中で、90万人の人口がある地域の脇を自然河川が流れていて、1日の乗降客数10万人を超えるような街は、見たことがありません。この恵まれた環境を皆さんがすごく理解して、大事にしていきながら生かしていきたいなと思います。

【坪田氏】

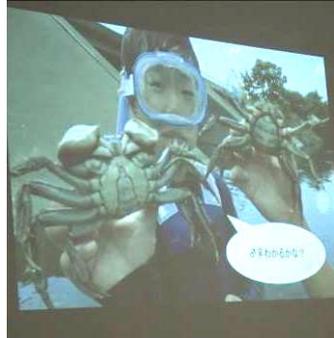
- 流域全体で、それぞれ多摩川を愛していらっしゃる方々がいると思いますが、見ている姿は少しずつ違います。将来的には、二子玉川でみんな合流できる、そういう聖地みたいな形になればいいのかなと思っています。

4.7 子どもたちによる夏休み自由研究の発表

子どもたちが多摩川で行った夏休みの自由研究について、パネル展示等を交えながら発表してくれました。



シゲユキ君、ケイシュン君、榎本氏



自由研究の発表



発表後の3人

○外来種の駆除を目標に釣りを始める

【榎本氏】

- せたがや水辺の楽校でいつも使っていた河川ではコクチバスが非常に多いため、エビが激減していました。
- そこで、最初はその護岸にてコクチバス等の外来種の駆除を目標に釣りを始めました。

【榎本氏】

- コクチバスって外来種だけじゃなくて、何だっけ？

【ケイシュン君】

- 特定外来種。

【榎本氏】

- いきなり1匹目でコクチバスが釣れたのですが、この後は結構苦労しました。
- この後は、本流が台風で増水していたため野川で実施しています。

○台風で増水のため、釣りは断念することに

【榎本氏】

- 野川では、アユやオイカワ、スゴモロコも捕れているのですが、少し足の速い魚は投網で捕れました。

【シゲユキ君】

- 生き物を捕まえるために水辺をガサガサするときの網はなぜ平らになっているのでしょうか。(会場の子どもにクイズをする)
- ガサガサの網は、魚が逃げないように底が平らになっています。

【ケイシュン君】

- 水辺をガサガサした結果、エビを大量にゲットしました。

【榎本氏】

- 野川では、今まだエビがとれていますが、本流では、こういう小さいエビが如実にいな

くなっています。

【シゲユキ君】

- シュノーケリングでヌマチチブが捕れました。魚を見つけたら、動きをよく見てから追い込んで捕ります。

【ケイシュン君・シゲユキ君】

- 石をめくるとモクズガニが出てきました。(モクズガニの雌雄を当てるクイズを行う)

【シゲユキ君】

- 雄のほうはパンツが三角になっています。パンツをめくると交接棒が4本あります。その中の2つは補助交接棒です。雌は、パンツをめくると卵を抱くための足があります。

【シゲユキ君】

- コクチバスは何を食べているのかを調べました。
- ウキゴリと思われる小魚が出てきました。

【榎本氏】

- 食べていない個体が多かったのですが、ここでは小魚が出てきました。他の場所ではエビの捕食も見られるのですが、この場所ではエビがほとんどいないので、エビが出てこなかったと思われます。
- その他にも特定外来種であるウシガエルや生態系被害防止外来種であるアメリカザリガニを見つけました。
- 今回、台風で増水してからコクチバスが一切釣れなくなってしまいましたが、もう一つ特徴がありました。前半ではマハゼとか汽水域の魚が結構釣れていましたが、台風後には、汽水域の魚がすごく減っていました。今、汽水域の魚がどんどん上のほうまで勢力を伸ばしているというのも、この結果から見る事ができたと思います。

4.8 「未来の多摩川夢プラン」づくり（意見交換会）

コーディネーター：佐山氏（みずとみどり研究会）、高橋氏（京浜河川事務所）

参加者の皆様に「多摩川らしさ」と二子玉川周辺が「こうなったらいいなと思うこと」の2つの意見をそれぞれ付箋に書いて、多摩川の地図に貼りつけていただきました。



佐山氏



高橋氏



夢プランづくりの様子

地図に記入された代表的な意見を紹介後、意見交換に入りました。

○「多摩川らしさ」という意見

- 「多摩川の流域全体としては、魚、アユなどがたくさんいるところというのが『多摩川らしさ』の1つではないか。」
- 「河川敷が多く、人に利用されているという、例えば六郷というところでの『多摩川らしさ』というのも強調できた。」
- 二子玉川の周辺では、「花火大会やいかだレースなど多くの人が集まるイベントがあるところというのも『多摩川らしさ』だ。」
- 「世田谷や水辺の楽校で子どもたちがはしゃいでいる様子、これはとても『多摩川らしい』のではないか。」

○「未来の多摩川夢プラン in 二子玉川」

- 「カワラナデシコ、カワラニガナ、カワラノギク、カワラサイコなどのお花畑。」…ほかの植物が生きにくい河原の環境の中で生きる河原固有種の話ですね。
- 「アシ原の部分があってもいいのでは。」…二子玉川では異なるかもしれませんが、多摩川全体で見れば、まだヨシ原があるところもたくさんあります。
- 「たくさんのツバメのねぐらが入っているヨシ原。」
- 「水がもっともっときれいになって、魚、鳥、植物が豊かになれば。」
- 「マラソンコースの整備がもっと進めば、ウォータースライダー、釣り専用施設、アスレチック、融合施設があれば…」…いろいろな川の利用の話がある中で、環境の話も入ってくるのが多摩川らしいのかなと思います。
- 「マナーやモラルを守って、皆が快適に利用できるようになってほしい。」

【佐山氏】

- こうなったらいいなという答え（未来の多摩川夢プラン）があって、皆さんが感じている「多摩川らしさ」というのがあって、その掛け算に皆さんからのアイデアをいただいて、こういった結果をもたらしたいと思っています。

【高橋氏】

- 「多摩川らしさ」というのは、たぶん基本的な条件や、皆さんが多摩川ってこうだよねと思っていることだと思いますので、その部分からスタートして、こうなったらいいなというところにつなげるために、どんなアイデアがあればいいかというところについて、幾つかご意見とかいただければなと思うのですが、いかがでしょうか。
- 先ほど話題提供いただいたエリアマネジメントさんたちは日ごろからお考えのようだったので、何かヒントとなるようなこととかあればお伝えいただければと思います。

【参加者】

- 予算が許されることであるならば、蒲田から出てきた東急多摩川線、多摩川までしか中途半端に切れてないで、線路を延ばして二子玉川につけるルートをつくってもらえると、なお「多摩川らしさ」が出てくる。
- 蒲玉線をつくるしかないですね、船で。そのために調布堰を若干壊す。

【佐山氏】

- 河川管理者としてどうですか、調布堰を壊すという意見が出ました。

【高橋氏】

- 今ある施設は、それぞれが必ずしも連携しているということはないのかもしれませんが、あることにはやはりそれなりの意義があります。そういった評価は、我々のほうが積極的にやっていかなければいけない部分なのですが、まだまだできてないというように受け取っていきたいと思います。

【佐山氏】

- 市民からのいろいろな無茶ぶりが夢の実現への第一歩というふうになるかと思います。もしかしたら、そのような一言が楽しい川づくりへの第一歩になるかもしれないので、市民の皆さんは、たくさん意見して、いい川をつくっていきましょう。私も、河川管理者の皆さん、もしくは流域自治体の皆さん、地域の皆さんと一緒に進めていきたいと思っていますので、こういう場がとても大事であると思っています。

【高橋氏】

- 河川管理者ということで多摩川を管理しているのが我々ですが、そこには流域の自治体の皆さんたちがいらっしゃって、河川敷を占用していただいているところもありますし、然環境が豊かな箇所は、自治体の皆さんと協力しながら、河川としてどうあれば保全とできるのかということを考えながらやっています。

【佐山氏】

- 基調講演では小堀先生からとても重要なお話がありました。市民も科学的にちゃんと調査をして川を知る、調べることによって、1つずつ前に進むのかなと思っています。皆さんもぜひ科学的に川を調べて、1つ1つきちんと行政の方に理解をしてもらえるようなデータづくりをしていただけると、さらに深まるのではないかと思います。

【高橋氏】

- 環境の話もあれば利用の話もあって、我々からすれば、そういったいろいろな意見があるということが大事であり、まさに「多摩川らしい」と思います。

【佐山氏】

- 皆さんからいただいた意見をさらに流域懇談会の中で、行政と市民がまた話し合って次の流域セミナーにどうつなげるのかということができた第一歩ではないかなと思います。
- 市民と行政と研究者の立場からいろいろな意見が出たかと思いますが、最後に、小堀先生に一言、お願いできればと思います。

【小堀氏】

- 先ほどから産官学民+子というので、これが交流できる本当にすばらしい場所はここだなという確信を持ちました。市民科学も入れてすばらしい活動がもっともっと広がることのできる場所だと思います。私も微力ながら皆さんの仲間に入れていただいて、すばらしい夢をもっと大きくしたいと思います。



夢プラン作りで出た意見

4.9 閉会挨拶【服部氏（京浜河川事務所 所長）】

最後に、京浜河川事務所の所長である服部さんから総まとめをしていただきました。

- 私は世田谷区の生まれですが、自分の小学生時代の川遊びと言えば、アメリカザリガニやどんな汚い川でもいるコイが釣れたり、大きいウシガエルを見ると喜んでいるような経験しかないのです。その時代は多摩川は余りきれいではありませんでした。最近、アユが大量に遡上してくるということを聞かされて、アメリカザリガニで喜んでいた人間には、驚天動地の出来事でした。
- 本日のパネルディスカッションや夢プラン作りでは、皆様からもっと多摩川をよくするための新しい考え方というのをやっていきたいという要望が出まして、私たちも多摩川の魅力を一緒になって掘り下げていきたいと思っています。
- ミズベリングでは、「川（変）ろうぜ」がかけ言葉になっているようですが、私もかけ言葉を考えてきました。「タマ」ということを辞書で調べてみると、平安時代の「魂合(たまる)」という言葉に出会いました。心が通い合うだとか、魂が1つになるといった意味があります。私もそういうつもりで臨んでいきたいと思いました。



閉会挨拶（服部氏）

5. いい川づくり交流ひろば

◇ 第1会場：兵庫島公園

● 炊き出し訓練、体験・展示コーナー

災害時に備えた炊き出し訓練として、災害備蓄食（アルファ米）の試食や多摩川産のアユの塩焼きなどの提供がありました。

また、「ストーンペインティング」や「クイズラリー」、「源流の丸太切りコーナー」、「災害対策車」、「多摩川ミニ水族館」など、盛りだくさんの内容で、多くの方にご参加いただきました。

◇ 第2会場：東京都市大学 二子玉川夢キャンパス

● 体験ブース・パネル展示

「多摩川検定」や「多摩川のいいところマップづくり」、「木帯細工」、「パネル展示」など、こちらも様々なブースがあり、子どもから大人まで幅広い年齢層にご参加いただきました。



家族でアユを食べる in 兵庫島



子どもたちでにぎわう夢キャンパス



東京都市大学 夢キャンパス パノラマ風景



源流の丸太切り体験



子どもたちの生き物展示
(夏休みに捕まえたようです)



多摩川検定に挑戦



多摩川の石でストーンペインティング



多摩川いいとこマップづくり



排水ポンプ車・照明車の展示



多摩川産アユの塩焼き



アユの塩焼きにできた行列



土砂災害体験車と降雨体験車



降雨体験車（と怖がる子ども）



多摩川ミニ水族館



ミニ水族館の色々なお魚たち



木帯細工体験



多摩川お絵かきコーナー
（塗り絵が人気でした）



アンケートへ回答中の参加者



パネル展示

以上